
人類異端 パラレル

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類異端 パラレル

【Nコード】

N4169C

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

<すみません、連載停止中です>物語の舞台は現代日本とそう変わらない世界の話。現代日本と最も違う所、それは超能力者のような存在が人知れず実在し、犯罪者や警察や軍人がそれを扱い、日々奮闘している。知識を持つ者はこの力を、この力を持つ者を「パラレル」と呼ぶ。これはそんな中、「パラレル」を持った青年の物語

第零話：裏の暮らしとそんな日常（前書き）

文章の基礎も知らない、中学生が書いた物なので
たいしたことはありません・・・
御承知の上でお読みください

第零話：裏の暮らしとそんな日常

「あはあ……ははは……ひひっは……」

ここは路地裏。

目の映るのはネクタイを緩めたスーツ姿の男性、少し肥満気味だが普通の人間に見える。ただし、目を見なければ、だが。

耳に響くのは狂った笑い声。路地裏という陰鬱な空気と相まって、まるでここがいつもとは違う世界ではないかという錯覚を受ける。

「めんどつくせえ……」

と、その異様な空間に少年とも青年ともつかぬ人物が一人。

それほど整った顔立ちではなく、もしすれ違っただけならば頭の片隅にも残らないであろうその顔。髪はボサボサと乱雑に伸びており、手入れの類とは無縁そうだ。どうやら学校帰りらしく、どこの高校か中学か判断のつかない詰襟を着て、眠そうな目で男を観察している。

その彼に突然気づいたかのように、スーツの男はゆっくりと、ゆっくりとした動作で首を回転。

「少年、路地裏は危ないぞ」

そう、忠告する。

だが彼はまったくの無視。それを聞き入れるかどうか以前に雑音とすら感じていないのか、そのままポケットに手を入れた。

取り出したのは携帯電話。慣れた手つきでコール。

そして二、三回の電子音の後、電話の向こうで誰かが受話器を取った。

「一条、多分だが……依頼主を見つけた」

眠そうな目をさらに細め、彼は男を見る。威圧でも警告でも注意でもなく、ただ見るだけ。

電話の向こう側から、少年のような声が響いた。

『そうか。それで状況は？』

小鳥がさえずるような美しい声音で、しかし事務的に声は告げる。それに対し、彼は視線だけを外さずに応じた。

「多分、パレルルだろ。麻薬とか普通の狂人でもいいが……それなら、ウチに依頼がくるはずがないしな」

男は動かない、しかし顔に浮かぶのは当惑の色。

『しかし……「助ける」とは端的な要求だな。俺たちに良識があるとも思っているのか？』

そして、彼と声は会話を続ける。

「良識がないのはお前だけだ……俺は人並みには良い人だと思っている」

『そうか。まあどうでもいい』

「ひどいな」

『それがどうした』

と、そこまで話したところで男が動いた。しかし今の彼の表情は、当惑ではなく憤怒。

「お、まえが……助けて………くれる、の、か……」

怒りの表情を崩さぬまま、しかし声は懇願。

「いや、俺は……」

『助けてやれよ。簡単だろ?』

電話の向こうから聞こえた最後の言葉がそれだった。通話が切られる。

「くそ………人事だと思って……」

舌打ち。不機嫌な様子で、しかし携帯電話を学生ズボンのポケットへ詰め込んで、両手を胸の高さに、両足を適当に広げて戦闘姿勢をとる。

「た………す、け………てくれ。妻も、息子も、私も、上司も、同僚も、他の人も、……」

男がそこまで口にした時、音が鳴った。

空気を切り裂く音、全てを断裂する音、人を死に至らしめる音。数瞬後、彼の後ろにあったゴミ箱が中心から二つに分かれた。

「助ける、助ける、助ける、助ける、助ける助ける助ける助ける助ける……」

斬斬斬斬。

壁が、地面が、宙が、断ち切られていく。

彼も例外ではなく、右肩を少し挟られている。

「真空波……っていうのは科学的にありえるのか？　というより斬ったという状況を作り出す力……？」

彼は首をかしげながらも、前に走る。そして、自分の瞳に指を当てた。

カラーコンタクトを取り外したのだ。今までの瞳は、もちろん黒。今の瞳は、街中を歩くと誰もが違和感を感じる色彩。突き抜ける晴天のような青。

「助ける助ける助ける助ける助ける！」

男の声は、もはや頼みではなく命令。それをはねのけるように彼は口を開いた。

「うつせえ！　助けられるかテメエみたいなの！」

そのまま、彼は男の眼を見た。視線を一度交錯させた。

ただ、それだけの事。

それだけの事で、男は何かにつまづいたように前倒れになった。

「ひっ……あ！」

そのまま、彼は前に走る。ただ彼ほどの年齢ならば平均的な速度で、しかし確実に。

そして彼はたどり着く、男の目と鼻の先という絶対的な距離まで。

「とりあえず、寝てろ」

そして殴打。前倒れになったままである男の鳩尾を殴る。

「ぐ……っが、はっ！」

一般的なケンカにおいて、鳩尾への威力は絶大。そのまま男は倒れこんだ。

しかし彼はそれでも足りないのか、近くにあったパイプ椅子の残骸を掴む。

「起き上がられちゃたまんねえからな……死ぬなよ？」

そのまま、頭を二、三回叩く。もちろん先ほど拾ったパイプ椅子で。

ガン、ガンという鈍い音。男は、それで完璧に意識を失った。

それが終わると彼はパイプ椅子を路地裏の隅へ放り投げ、再び携帯電話を取り出した。そしてもちろん通話。

今度の相手は、電話に出るまで数十秒掛かった。

『貴様か……どうした？』

出たのは男。若い声だがはつらつとした印象は無く、ただ陰鬱と面倒くさそうに事務的に質問してくる。

「飯島^{いいじま}サン、一人、確保しました。位置は俺の携帯の発信機で分かるでしょう？」

『……無駄に仕事を増やすな、こちらら固定給だぞ？』

「俺なんて小遣い程度にしかもらえませんよ」

お互いに自分の境遇を皮肉って、どちらからともなく自嘲の笑いを漏らした。

これが少年、うえだ上田 かずおみ一臣の日常である。

第零話：裏の暮らしとそんな日常（後書き）

これは某大手無料ゲームサイト（名前書いて良いのか分からないのでこれで）のブログで公開した小説のリメイクみたいな感じです。

こっちと違い行き当たりばったりで書いているので文章がさらにひどいとは思いますが同じIDで書いてますので某大手（略）に登録している方は興味があったら覗いてください

第一話：表の暮らしと身近の悪魔

放課後、学生が解放される時間。その時間に彼は私立一条高校の校門の前にいた。

彼 一臣はこの生徒である。

「よっ！カズ！」

後ろから違うクラスの中学からの友人が話しかけてきた。

「今日ゲーセン行くけどお前も来る？」

「ごめん、今日は無理。仕事があるんだ」

「なんだよ、最近付き合い悪いな」

少し苦笑し、それから友人は自分の家のほうへ、一臣は商店街へ進む（やりたくてやってるわけじゃねえんだけどな）

心の中でだけ呟き、ため息をつく。それから携帯を取り出しいつものように電話する。

「おい一条、今から事務所に行く。仕事はあるか？」

『今日はこっちに来てくれ、仕事はそこで言う事にする』

それから一条の笑いを噛み殺したような声が聞こえる。

もう一つ、大きなため息を吐いた

「よお、来たか一臣」

どでかい屋敷の隠し部屋のようなところに俺はいた。一条家の一条悟の部屋である。

目の前にいる一条は不登校の同級生の男、なのだがそうは思えない。理由その一、こいつは何十年かまえの事でも見てきたように話す。その二、こいつ見た目は12歳ぐらいにしか見えない、しかも中性的なとても整った顔で

喋り方を変えて女の服を着れば少女アイドルとしてスカウトされそう
うだ。

「おい、仕事ってのは？」

テンションが低い事を表したような声で訊ねる。

はじめはこいつに驚いたがなれば同年代と話しているのと変わらない。

「誘拐だ」

ポツリと一条が言った。唐突に短い単語を言われたのでフリーズしたがそれも一瞬

「重要な事はやく言えええええ！」

「ナイスリアクション、一臣！」

人が怒つてるといふのにさらに腹が立つようなことを言う。いつそ殺そうか、こいつ。

とりあえず気を落ち着けて仕事に必要な情報を聞く

「……警察に任せる仕事じゃないのか、それは。まさか犯人が……」

「逆だ、さらわれた方が、だ。はやく助けないと大変な事になるぞ、犯人の方がな」

そこでおかしそうに笑う。こいつは人の不幸だろうがなんだろうが
楽しむ悪魔のようなやつだ

「くそっ！場所は！？」

「地図を描いておいた、行くなら速く行け」

ここから走って15分ほどの廃ビルだ。もし間に合わなかったら犯人も被害者も大変な事になる

廃ビルに向かい全速力で、俺は走り出した。

第二話：青い瞳と異能の定義

「ハア・・・ハア・・・お前ら、ちよつと・・・待て」

廃ビルにたどり着いた一臣の、これが第一声だった。

15分間全力疾走、部活もやっていない一臣が疲れるのには十分すぎる距離だった。

「誰だ、お前!？」

見ると部屋の中には4人いる。

縄で縛られて猿ぐつわという、いかにも古典的な方法で拘束されているのが被害者だろう。

「お・・・れは、探偵、だ・・・。そのや、つ・・・危ない、からひきわた、せ」

息も絶え絶えに一臣が答える。それに犯人グループがさらに返す

「ああん、いきなり出てきて何言ってるんだガキが！」

こいつを連れてきや金がもらえるんだ、邪魔すんじゃないねえ！」

口ぶりから察するにこいつらは警察を呼ばれようが怖くないのだろう、

外国にでも逃げるのだろうか。

そしてもう一つ分かった事は諦められないほどの大金がかかっていることだ、

話し合いで渡してはくれないだろう。

「仕方ない・・・か」

「何落ち着いてんだ、ガキイ！」

男の一人がナイフを持って襲ってくる、普通なら恐ろしいだろう。

だが一臣は普通ではない、落ち着いた態度でコンタクトレンズを外す。

一臣の目が普通の黒瞳から白人よりも鮮やかな青色に。

この世界には人類から派生した新種の生命体がいる、それが「パラレル」

人間と平行して進化したこの生命体のほとんどは

自分が人間と違うことを知らない、人類もこの存在を認知する者はほとんどいない。

「パラレル」とは己が心の在り様を現実に見す異能である。

憎む者には刃を、愛す者には盾を、観察者には眼を与える。

そしてこの少年の能力は・・・

ナイフを持って男が近づく、だが恐れもせずに一臣はその男の眼を「見た」

「何してん、うお！」

言葉の途中で男が倒れる。そこに一臣が馬乗りになり眼を「合わせる」

別に殴ったわけでも毒を飲ませたわけでもないのに男が気を失う。

これが一臣の「パラレル」、眼を合わせた相手の脳に直接暗示や命令を与える力である。

長い間、または何度も眼を合わせないと難しい事はできないが転ばせるくらいなら一瞥ただけでも十分だ。

「う、わあああ！」

残り二人の内、一人が錯乱する。懷から銃を取り出した。

「う、う動くなあ！絶対、そこから、動くなあ！！」

必死といった様子でこちらを見る男。その男に返答を返す

「撃つてみるよ」

「う、ウウウアアアアア！」

初めて銃を撃ったのだろう、明らかに手がぶれている。だがそんなことも関係無しに「命令」は完成していた。

男の銃は相棒のわき腹を貫く。

「うあわああ！」

銃を持ったまま男が硬直している。その間に近づき腹に一撃、顔に3回。

男たちが一人も動けないのを確認して、いつもと同じように警察に電話する。

さすがに息を整えないまま戦うのは疲れた。だがまだ最後の仕事が残っている。

縄を解こうと、俺は監禁されていた人物に近づいた。

第三話：無言の少女と警察官

（何だこの状況・・・）

事務所に来た一臣は呆然とした。めったに家から出ない一条がいることに、

そしてそれ以上に同じ年ぐらいの女の子がいることに。

「おお、一臣か。やっと来たな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？どうした？」

「説明しろおおおお！！！」

この状況の説明をするにはまず昨日の事件の顛末から話さなければならぬ

その後、被害者の縄を解いて警察と話をしている時は驚いた。

「それじゃあ、あの娘は・・・」

縛られていたのは少女だった、それはいい、よくある事だ。

「ああ、犯人のうちの一人は被害者の父親だった」

いつも俺の通報で駆けつけてくれる二十代の敏腕警部 イイジマ 飯島警部の話では親が子売ろうとしていたらしい、驚きの次に怒りが沸き起こる。

「とりあえず行く場所がないから今日は家に帰すが・・・」

「待てよ！この娘の母親家にいるんだろ！？共犯者の可能性が高いだろ！？」

「母親は関与を否定しているし証拠もない。そんな状況で匿ってくれる所なんて無いんだよ」

頭に血が上り、反論の言葉を紡ごうとした時、電話が鳴った。相手

は一条だ

『もしもし、一臣。どうやら大変な事になっているらしいな』

「・・・・・・なんて知ってる、そして電話のタイミングが良過ぎるんだが？」

『愚問だと分かっているはずだろう？』

こいつは知るはずの無い事でも絶対に知っている、おかしいが今更気にしても仕方がない。

『とりあえず俺にあてがある、任せろ』

「本当か！頼む！」

もう一度「任せておけ」と言い、一条は電話を切った。

あの不吉な笑い声も、このときは気にならなかった

「あてってここかよ！」

机を叩いて叫ぶ。不吉的中・・・・うれしくねえ・・・・

「別に良いだろ？風呂もキッチンも冷蔵庫もある、生活には困らないぞ」

ここは大富豪である一条が借りた場所だ。

立地条件はともかくとして内装などは完璧なのである。

「・・・・まあ、いいか。別に俺がここに住んでるわけでもないし」
気に食わないが無理やり納得することにする。

「住んでるわけでもないが大変だぞ、こいつ、喋れないからな。理由は精神的なものらしい」

「・・・・副作用か」

「パラレル」は自分の精神的な特性を外に出せる代わり、心が脆かったり

体に異常が出る場合がある。それを副作用、または汚染という。

一次汚染は『精神に障害の出た者』、二次汚染は『体の一部が変形、変異した物』

三次汚染は

『体の60%以上が変異した者、及び生物として生存できない状態で生きている者』

余談として一臣は瞳の色が人と違う二次汚染者である。汚染者は隔離されるのが普通だが、一条が「汚染者を捕まえるのを手伝わす」という理由で警察から引き取り、今は逆らえない生活をしている俺である。

「あと、性格が幼いぞ、こっちは元からかも知れんがな」

現在少女に髪を引つ張られたり服を引つ張られたりして遊ばれ中です、確かに幼い。

「こいつの名前は？」

「三崎 ミザキ 亜理紗 アリサ だそうだ。字はうまく書けるから知能は普通らしい」

じゃあ、子供に大人の脳みそ入れたようなもんか、ある意味余計厄介だ。

「ああ、それと飯島から電話があつたぞ、ここら辺で妙な誘拐犯が出ると言っていた」

「妙な・・・？」

「ああ、片っ端からさらっていつて気に食わなきゃ何もせずに返すそうだ」

「片っ端からって・・・すぐ捕まるだろ？」

「なかなか捕まらないから『パラレル』かも、という事らしい。

まあ、証拠が出ればこっちに協力依頼が来るだろう」

この時はぜんぜん気に留めていなかった、

まさか仕事以外で事件に巻き込まれるなんて思っていなかったのだから・・・

第四話：赤い瞳と誘拐事件

亜理紗が来て4日目。出勤すると亜理紗がいる事に慣れてきたがこの日は少し驚いた

「・・・何だそれ？」

「ホワイトボードだ、知ってるだろ？」

『意思表示用』

亜理紗が首から小さめのホワイトボードを吊り下げていた。
ちなみに『』は亜理紗が書いた字だ。

『喋れなくても大丈夫』

見た目は全然大丈夫じゃないのだが本人が大丈夫らしいので黙っておく事にした。

こんな風に亜理紗がいることが当たり前になってきた時、

事務所から亜理紗が消えた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

走っていた、全速力で。今日、事務所に行くと亜理紗がいなかったのだ。

一条も何も知らなかったようだ。自分で出かけたにしても連れ出されたにしても危ないのでこうして探しているという訳だ。

「ワン、ワン！」

犬が擦り寄ってくる。この犬はさつき命令を組み込んだやつだ、俺の眼は動物にも使える。

命令の内容は「この匂いのもとを見つけたら俺のところに来い」だ、匂いは亜理紗の服を持ってきた、緊急時だ、仕方ない。

コンタクトを外し「命令」する。「その匂いの場所に案内しろ」

その場所は意外と近かった。近くに港がある倉庫の中だ。
倉庫に入り、叫ぶ

「おい、亜理紗！ここにいるのか！？」

しかし待てども返事は返ってこない。仕方なく奥の方に足を踏み入れる。

「おい！亜理……」

頭に固い感触と鈍い痛み、頭を殴られたと気づいた時には意識は闇の底にあった。

気が付くとそこには下卑た笑い声が二つ。

「ひゃっはっは！たまたま獲物が入り込んでくるなんてついてるな
！」

「こいつ提出すれば昇級できんじゃねえか？」

言っている意味は分からなかったがやばい事になっているのは分かった、

「お、起きたか！？」

「じゃあ、俺は見回ってくるわ、殺すなよ」

俺が起きた事に気付いた二人組は二手に分かれた、とりあえず状況を尋ねる

「おい、お前らなんだ？これはどういつもりだ！？」

「ま、落ち着け。俺らは組織の者だ。これは話を聞いてもらうための準備。組織って何だって質問には答えられないぜ、協力するなら別だがな。」

訳が分からない、だがそんなことはどうでもいい。なぜならこの部屋にあってはいけない物を見つけたからだ。

「世の中腐つてるとおもわねえか？俺らは警察とか軍隊とかいらね

えって思ってたんだ。お前もそんな物に縛られて・・・」

男の長口上が続く。そんなもの耳に入らない、俺が見つけたのは亜理紗が吊り下げていたホワイトボード、あのサイズは一条が頼んだ特注品だ。

頭の中で色々な事が浮かぶ、そして結びつく。

誘拐犯 特定の人間をさらう 実の親に売られかけた亜理紗 特殊な存在「パラレル」

こいつらがさらっているのは「パラレル」ではないか、現に自分も「獲物」と言われた。

こいつのせいで亜里沙は親に売られたのではないか、そう思うと怒りがこみ上げてきた

「おい、ふざけるなよ！てめえ！」

「・・・お？お前今なんつた！？それは協力しないとっていいんだなあ！！」

演説が良いところだったらしい、男は激昂している。

だがそれもうでもいい、俺も最高サイタイの気分だ。こいつを殴りたくて仕方がない。

「言つとくがよお！てめえが協力しねえんならここで消すぞ！」

男は懷から拳銃を取り出す、確かにそれならば俺がたどり着くまでに打ち抜けるだろう、余裕なのも理解できる。

だが「パラレル」を相手にするにはいささか不注意すぎた。

男が引き金を引く。放たれた銃弾は俺の眉間に突き刺さるうとして、それは後ろの床に当たった。

「なっ!?!」

人間の反応速度では銃弾をよけるなど不可能に等しい、だが不可能を可能にするのが「パラレル」だ。

テンションが普通以下の時、俺の眼は青い。

そしてテンションの高い時 今は赤だ、血を塗りつけたような禍々しい紅。

青の眼は「外への命令」、赤の眼は「自分への命令」、俺の命令の伝達速度は電気信号なぞ軽く凌駕する。反応の限界を超えた動き、脳のリミッターを無視した力、体の器官の動きの書き換え。

これら諸々全て今の自分には可能だ。護身用にもいつも持ち歩いているカッターナイフの刃を剥き出しにして男に迫る。

さあ、処刑の始まりだ・・・

第五話：解決と新しい厄介事

危機回避本能 カット 聴覚 カット 色彩 カット

痛覚 カット

敵の殲滅用に脳を作り変える。自分の体に「命令」する。

脳の負荷を減少させ伝達を少しでも速くするように努める。

銃弾が頬をかすめる。だが今、俺は痛みも恐怖も感じない「自分の傀儡」だ。

0.5秒、敵に接近、銃弾を避ける

1.0秒、敵に接触、右腕にカッターの刃を突き立てそのまま刃を折る

1.5秒、敵は錯乱、狙いも定めず撃った弾を1回避け1回カッターで弾く、2発それる

2.0秒、敵の首をカッターで裂く、血液の量から致命傷と判断、放置

町を騒がせた誘拐犯は2秒で物言わぬ肉塊となった。

あの倉庫から少し離れた海の近く、ここでも事件が起こっていた。

「向こうを囲め！一人も逃がすな！」

指示を飛ばしているのは飯島である。

警察は誘拐犯が船で被害者を運ぶという情報を得て、ここを見張っていた。

そして大当たりだったというわけだ。

10人ほどが小型船舶に乗ってきていたがそのほとんどは既に拘束

している。

解決は時間の問題だ、と思った矢先

「警部！「パラレル」です！」

嫌になる、たまたまという可能性はあるがこれが「やつら」ならもつとややこしい事になるだろう、どっちにしるここでの戦闘というおまけ付だ。

ため息をつき、腰の拳銃に手をかける。

「能力は？」

「足をのばぶっ！」

言葉の後半が変なのは敵の蹴りで警官が飛ばされたからだ。

片足だけが3メートル弱の長さになっている。拳銃を引き抜き、撃つ。

しかし予想されていたのか敵は地を蹴り飛び上がる。好都合だ、空ならかわせない。

「なっ！？」

そう思った俺はまだ敵に対する認識が甘かったようだ。

やつは空中から地面へ足を伸ばし体勢を整えた。それと同時に一発の蹴り

横に倒れるように飛びそれをかわす。油断していた、しかしもう容赦をするつもりはない、

横に倒れているさつき蹴られた警官の懷から拳銃を取り出し倒れたまま片手に一丁ずつ持つ。

その体勢でよどみなく乱射、逃げる暇など与えない。

それら全ては威嚇と牽制のためだったが隙を与えるにはそれで十分、次の瞬間には優秀な部下たちが拘束を開始した。

「警部、発砲はまずかったと思いますが・・・」

こんな事を言わないでくれたらもつと優秀な部下なのだが。

「上の連中はこいつらを知らないから普通の犯罪者と同列に扱う、困ったものだ。」

・・・分かった、分かった。始末書は書くからそんなに

睨むな」

その部下から逃げるように被害者の確認のため、船内に入る。

「こいつは・・・」

そこに倒れていたのは数日前の誘拐事件の被害者、三崎だった。

「つくづく誘拐に縁があるようだな、亜理紗」

そう言って一条はニヤニヤと笑う。

ここは事務所だ。あの後三崎を探して走り回っていると三崎を保護した警察に出会ったのだ。

今ここには俺と一条、三崎、さらになぜか飯島警部もいる。

俺が拾っておいたホワイトボードで一条を叩く三崎を見ると飯島警部が口を開いた。

「一条、聞いてほしい。どこかの組織が本格的に動き出したようだ。」

「

「ああ、知っている。」

「組織？動き出した？どういうことだ？」

「最近になって「パラレル」を悪用する組織が出てきている。一条に聞いてないのか？」

「言っていないぞ、言う必要も無かったし面白い話題でもないしな」

「えーと、もしかして俺も協力しなければならぬのか・・・？」

「「当たり前だ」」

二人に同時に宣言され、三崎が事務所を走り回る中俺は見事に硬直した

（もういやだ・・・まともな人生をください・・・）

彼の願いが神に届くことはなく、これより先はさらに大変で厄介な事になるのだった。

第五話：解決と新しい厄介事（後書き）

第一編終わりの感じです。

つぎはたぶん番外編を挟むと思います。

番外話1：別れの青と出会いの赤

動悸が激しい、息が荒い、目が回る、足取りがおぼつかない。

「ハア・・・ハア・・・なんで!？」

それは当たり前前といえば当たり前だ

「何でこんな事に!」

だって彼は

「なってんだよおおおお!!」

人を殺してしまったのだから

「警部!「パラレル」とおぼしき・・・」

「わかつてる!今から現場に向かうところだ!」

優秀な部下その1に怒鳴りながら彼 飯島は急ぐ。

(いきなりこんな事件かよ・・・!)

実績を認められ警部にまでなったのは良いのだが・・・自分が配属されたのは

対「パラレル」専門の部署だった、出世は出世だがこれでは厄介払いだ、危険が大きすぎる

しかも配属して一週間と経たないうちに殺人事件が起きた、パラレルが関わった事件である。

パラレルの起こした事件は見極めが難しい、故意に起こした「殺人」なのか

不安定な精神状態のために起こった「事故」なのか判断がつきにくいのである。

それゆえいきなり殺人事件となると嫌になる、給料が普通より高いのも頷ける。

しかも普通の事件と見ても厄介だ、父親を殺害した中学3年生の男児が逃亡、

母親から「息子が尋常じゃない」という電話を頂き、参上させて頂いているという訳だ。

そしてその少年を発見したと優秀な部下その2から連絡が来て、しかも少年の目は青だったらしい、これでパラレル確定だ、今から完全武装で向かうというわけだ。

「まあ・・・楽に済めば良いけどな・・・」

ただの希望だったがこのがかなうことになるとは思ってもみなかった。

とりわけ仲が悪い家族ではなかった、強いて言うなら運が悪かった。息子がパラレルでなければ、「眼」を見て説教さえしなければ。

ただの反抗期というものだった、脅すだけのつもりでナイフを持つと勝手に親父が刺さって死んでいった。こんなにすぐに死んでいいのか、と思うくらい簡単に。

母親に見られてよく分からなくなって、気付けば上田 一臣は路地裏にいた。

そしてそこで「そいつ」に出会った。女のような男、子供のような青年に。

「お前、なんだよ・・・!」

不安定な精神状態は恐れと怒りが顕著に現れる、俺の場合は両方だった。

「お前は世界が怖いんだな」

「!?!」

そいつは唐突に語りだした。

「怖いから全てを思い通りにしたがる、それがお前の眼の力」

「・・・黙れよ」

「でもいきなりそんなものを得ても、使い道が分からない、だから余計に怖くなる」

「黙れ・・・」

こいつは全て知っている、そんな恐怖が頭をよぎった。

そして怒りと恐怖で狂った俺の眼は青から赤へ。

「その眼は・・・自分が怖いんだな、自分で自分を操れないから操る力が欲しくて」

「黙れよ！」

自分でも信じられない速度で俺は駆ける、だがこいつは動かない。

拳が顔に届く、という所でこいつは再び口を開いた。

「大丈夫だ」

拳は止まっていた、何が、なんで、そんなものを超越した響きが、その言葉にあった。

「俺が道を示してやる、俺がお前を助けてやる、だからお前も俺を助ける」

そういつてこいつはおかしそうに笑った、俺は呆然としていた。

サイレンの音がする。警察が来たようだ。

「話をつけてきてやる」

その言葉に何の疑いも持たずに俺は馬鹿みたいに座り込んでいた。

結果、俺は無罪となり勝手に高校を決められたり、事務所を任せられたり、

夜な夜なパラルルの鎮圧に乗り出す事になるのだが・・・

これが俺　一臣とこいつ　一条の出会いだった。

番外話1：別れの青と出会いの赤（後書き）

更新の間が空きました、スイマセン。

今までのが早すぎた気もしますが（笑）

一編は話が早すぎたと思いますが

二編はもっと考えて書くように致しますので

読んでくださっている方の少しの暇つぶしにでも
なれば幸いです。

第6話：事件の依頼（前書き）

第二編始まりです、編により題名の真ん中に特徴をつける様にしていますのでそれで見分けてください。

一編は「と」でした。二編は「の」です

第6話：事件の依頼

ここは一条探偵事務所　一臣たちの拠点だ。

その部屋の脇には布団が敷かれていた、寝ているのは一臣だ。

「あゝ、チクショウ。何で全力出してんだよ、俺」

そして布団の中でぶつぶつと文句を言っている。

赤の眼は別に身体能力を高めるわけではなく、普段は外せないリミッターを強制的に焼き切っているだけだ。つまり体を酷使するわけで、今一臣は全身筋肉痛だ。

その後、重症の一臣を見た亜里沙は自分が看病すると言い出した。

一臣はアパートの一人暮らしであり、必ず帰らなくてはいけないという訳ではない。

だからここですつと寝込んでいるというわけだ。

「あ、亜理紗」

昼の食事を作った亜理紗が近づいてくる、品はハンバーグ定食、やる事のない亜里沙は手の込んだ物をよく作る。そして味もそのらの定食屋には引けをとらないほどだ。

しばし無言で食べていると亜理紗が目を輝かせてこっちを見ている、その意図を察した俺は声をかけてやる。

「ああ、うまいよ、これ」

そうすると亜里沙はいきなり目にも留まらぬ速さで抱きついてきた、性格が幼児なのでたまにこういうことになるのだが色々と困る。

「ちよ、ちよつと、離れる亜理紗！」

なおも抱きついて離れない亜理紗、俺の手は今大変なところにある。うん、くだ、ってなに赤の眼バレルの処理能力無駄に使ってんだ俺は。

その時、いきなり扉が開いた。

「えと、あのあの、な・・え？お邪魔でしたか？」

「いえ、全然！」

扉を開けて入ってきたのは外国人の女の人だった、でもそんな事を

気にしたのは30分後、
なぜならこの人と亜理紗をなだめるのに30分かかったのだから。

「取り乱してしまつてすいません・・・」

流暢な日本語で外国人の女性 エマさんは詫びてきた。

「こちらこそあんな変な状況で出迎えてすいません」

椅子に座った一臣は形式的にそう返しておく。亜理紗は今、皿を洗っている。

「それで用件なんですけど、ここつてよく分からない事も解決してくれるんですよね・・・？」

内心ため息をつく、また一条か。やつは金持ちの上、黒い権力を持っているから

自分の顔を見られずに自然に情報を渡すのなんて朝飯前だ。

ここに仕事を持つてくるのは俺への嫌がらせだろう

「・・・はい、そうですけど」

でも人を見捨てるのも気が引ける、この性格も熟知した上でこんな事をするから意地が悪い。

「じゃあ、依頼を聞いてください！私の友達を助けてください！」

第7話：教会の惨劇（前書き）

今回から多少グロテスクな表現を含みます。
段々きつくなっていくと思います、ご了承ください

第7話：教会の惨劇

血の海

その状況を説明するのにこれ以上気のきいた言葉はないだろう。

「いやああああ！」「うわああああ！」

同僚たちの悲鳴が聞こえる、この地獄の中彼女 エマはクローゼットの中に隠れていた。

何がなんだか分からない、突然悲鳴が聞こえたからこの中に隠れていた。そうしたらすぐこの状況になった

ここは山奥の寂れた教会だ、叫ぼうが喚こうが声は届かない。

必死に目をつぶりその惨状を見ない様に努める、

だが「ぼとっ」という何かが落ちたような音が聞こえ恐る恐る目を開ける。

それは人の手首だった。

「ひッ！」

悲鳴が短かったのは最後の理性だろう、おかげで彼女は見付からずに済んだのだから。

意識が飛ぶ前に彼女が見たものは、手首の無い死体とフードをかぶった小柄の人物だった

クロイエンツム

『沈黙幽霊だと思っぞ、そいつは』

エマさんの話を聞いた後、俺は一条と電話で話していた。

エマさんの依頼はその騒動でいなくなった友人を探してほしいというものだった。

警察は事件の解決には熱心だがそれは犯人に対してで友人は死亡と断定されているとエマさんが言った。

もしかしたら死体さえ残っていないだけかも知れないが希望があるうちは　ということでここに依頼に来たらしい。

そして意識を失う前に見た犯人の姿を一条に伝えて情報を聞こうとしたのだが、

まさかこんなにも早く情報を得られるとは思っていなかった。

「で、沈黙幽霊ってのは何者だ、まさか本物の幽霊って訳じゃねえだろ？」

『当たり前だ。そいつはお前みたいな民間協力者だ。姿を見せず、声も聞かせず、

正体を隠しているからこの仇名がついたそうだ』

「協力者って事なら警察側だろ？なんで犯罪のような事を・・・」

『今までただ合法的に正当防衛と思わせ殺人がしたかったただけだとすれば？』

組織が事を起こし混乱している今の状況ならば・・・』

「十分ありえるって事か・・・」

ひとつ、大きなため息を吐いた後、まだ痛む体を引きずりおれは情報収集に出かけた。

あくまでも目的は友人だ、幽霊とやらを倒す事ではない、それならこの体でも十分だ。

扉を開け、久しぶりに見た空はとても綺麗だった。

「被害者の一人がお前に接触を？警察に任せりやいいのに・・・」
ここは事件現場の教会の前、話している人物は一臣と飯島だ。

「あんたらが犯人追ってばかりで行方不明のやつ探してないからだろ。」

いきなり仕事が来たこっちの身にもなれ！」

腹いせに怒鳴ってやった。だが飯島警部は涼しい顔をしている。

「俺らは化物専門だ。搜索してる部署なんてしらねえよ。で、情報を聞きに来たんだろ？」

民間協力者である俺はある程度なら警察に準じた権限を持つ、もちろん情報の閲覧も可能だ。

聞きたかった話は聞いた。沈黙幽霊の手口と今回の犯行の得物えものについてだ。

まず沈黙幽霊の話。今までやつにやられた犯罪者の死因は鈍器によるものか刃物によるものらしい。

そして今回の犯行は教会に飾ってあった大振りの宝剣 余談だがこの教会は異教でよくこういうものを崇めているらしい が使われた。勿論、刃は落としてあるがそれなりの重量があり、叩いて斬る事も可能らしい。

しかも研ぐと普通に使える代物だ、なんてものを崇めてるんだこの教会。

とりあえずそれが持ち去られているそうだと、危険極まりない。

「……とりあえずこんなところだ、もういいか？」

疑問系だが速く終わりたいという意思が言葉の端々にでていた。

「ああ、聞きたいことは聞いた。それと……」

「二度と俺達パラレルを化物と言うな」

そう言つて一臣はいつの間にか外していたコンタクトを手に持ち青い目でにらんでいた。

一臣は自分を人間だと主張するつもりは無いが化物扱いはさすがに許せない。

「わかった、わかった。そう怒るなよ」

ため息をつき、飯島は謝罪する。それで気が済んだ一臣は背を向け山道を降りようと、

「でもな・・・」

片手を挙げ挨拶するかのように自然な動作で腰の銃を引き抜き片手で構える。

「本当の化物になったら、俺は迷わず撃つぞ」

三次汚染者のパラレルに対して警官は「正当防衛」の名の元に発砲が許されている。

そこまで染まれば化物だと、そこまで染まれば敵だと飯島は暗に言っている。

「あんたは警官だからな、それでお互い妥協という事で」

「ああ・・・わかったよ」

その会話の後、飯島は出した時と同じ淀みない動作で銃を戻す。

「「またな」」

どちらともなくそう言い、お互いの言葉は森の中へ消えていった。

第8話：幽霊の誘い

「うひああああ!!!!」

路地裏には悲鳴、逃げる男性、そして加害者。

加害者は1メートル弱の長さの西洋剣を持つている、形も重量も実戦向きとは言い難い。

だがそれを軽々と振るう加害者、西洋剣は首を撥ね一本道の袋小路に紅い大輪の花を咲かせる。

それを無表情で見つめる加害者

「・・・会わなきゃ・・・」

眩きはコンクリートに吸い込まれ加害者はその場を後にする、目的を成すために

**

「はあ・・・」

飯島警部から話を聞いて2日後、一条からの情報で次の被害者が出た事がわかった。

その人物は一条家の事業の「裏」のお得意さんだったということでああ、いつ殺されるか分からないような人だったらしいがそれでも現代日本で殺人に大振りの剣を使うのは、ここらでは沈黙幽霊ぐらいだろう。

殺人に使われた剣は鋭い切れ味だったようで、それはつまり剣を砥いだということと、とてつもなく厄介だ。

とりあえずこれ以上厄介な事になる前に解決したいでこうして探索を続けている。

しかしこれだけ探しても見付からないという事は既に被害者はそんな考えに至った時、

携帯電話が鳴った、相手は「一条探偵事務所」。通話を繋げる。

『今すぐ来てくれ』

録音された一条の声が聞こえる、亜里沙は喋れないから連絡はこうやって行う事にしている。

何の用かは知らないが無視すると後々面倒くさいので事務所に向かう事にした。

「あの・・・すみません、お邪魔してます・・・」

事務所にいたのは20前半の エマさんと同じ年ぐらいの ひとだった。

「えーっと、誰、何の用？」

まず、当然の疑問を口にする。ここに知り合い以外が勝手にいるのは珍しい事だ。

「私は大野と申します。用は、ここに来れば人探しをしてくれると聞いてきました」

そして大野という依頼人は驚くべきことを口にした。

「友人を・・・エマを探してください・・・！」

なんとという偶然、エマさんの探している人はこの人で、

この人は今までエマさんと同じようにずっと探し回って、ずっとすれ違っていたらしい。

そして探しているうちにここの存在を知り、訪ねてきたというわけだ。

「とりあえず、エマさんに電話してみるよ」

ついでに言うとエマさんの携帯電話は連絡用に一条が渡したものであり、決して大野さんが電話の存在を忘れていた間抜けというわけ

ではない。

まあ、そんな事はともかく事件は終わると思っていた、この電話をするまでは。

『あなたが事件を解決した、あの廃倉庫で待っています・・・』

明らかにエマさんではない、この声は・・・。

考えているうちに通話が切れる、とりあえずやばい事だけは分かった。

俺は廃倉庫へ全力で走った。

廃倉庫にたどり着き中へ入る、すると突然

背中に違和感

振り向こうとすることが出来ない、凶悪なまでの圧迫感と背中に押し当てられた刃物がそれを許さない。

「そのまま話を聞いてください・・・」

これが俺と、沈黙幽霊の最悪の出会いだった。

第9話：裏切りの白い翼

「そのまま話を聞いてください・・・」

状況に反してその声はとても穏やかだった。

「・・・あんたが沈黙幽霊クワイエット・ソルトムか・・・？」

喉の奥から声を絞り出す。後ろから刃物を突き立てられている状況で、素人がここまで出来れば上出来だと思う。

「はい、そうです。少し前からあなたを見ていました。」

予想外の言葉が沈黙幽霊から出る。

「ちよつと待つてくれ・・・、殺人狂が俺に何のようだ？」

当然の疑問、俺は仕事以外ではパラルルの相手はしたくないし、殺人狂のお仲間って訳でもない、もしそうなら既に飯島警部が俺を殺してる、絶対。

「私は殺人狂ではありません、話を聞いてほしくて・・・」

「どういうことだ！」

更なる予想外、振り向くなといわれていたのに俺は後ろを見てしまった。

そこにいたのは自分と同じぐらい、いやもしかしたら自分よりも年下かもしれない、フード付の上着を着た女の子だった。

「う、あわうああ！」

見た瞬間、少女は奇声を上げフードをかぶった。そして全力で倉庫の端の方まで逃げてしまった。

後から聞いた話なのだが少女はパラルルが一次汚染まで進んでおり、そのせいで人に顔を見られるだけであそこまで慌てるほどの恥ずかしがり屋になったのだという。

こちらを向くなといったのもそれが原因で警戒したこっちが馬鹿みたいだ。

「とりあえず話を戻すぞ」

「はい・・・」

その後、なんとか沈黙幽霊をなだめた俺は今度は沈黙幽霊と向き合
って話をしている、まあ向こうは顔が見えないほどまでフードを目
深にかぶっているのだが。

「とりあえず、俺を見ていたってのはどういうことだ？」

とりあえず同年代らしい事が分かったのでタメ口にしておく、なめ
られるのも嫌だし。

「・・・組織が動き出したと警察の人に聞きました、相手が集団だ
とすると大勢で仕事を請けたほうが便利だと思っただけです・・・」
話によると沈黙幽霊は日本中を飛びまわり仕事を請けていて決まっ
た家などはないらしい。

なので全国を探し回って同業者を探していたのだという。

「少し前・・・この前の事件の被害者を助けて手伝ってもらおうっ
て始めは思ってたんですけど」

あの事件には裏でこいつも関わっていたらしい、敵にパレルが居
なかったのもこいつが大半を片付けておいたからだそうだ。

そしてあの時、俺を見て組むに値する相手かどうかを見定めていた
らしい。

「それで提携のことを言おうと思ってたんですけど・・・監視もつ
いてて・・・」

あ、私が携帯電話を持っているのもそれが理由です」

その「監視」に干渉されると厄介なので自然と呼び出せる理由が欲
しかったそうだ。

なのでエマさんに預けておいたこの電話を盗んで、電話がかかって
くるのを待っていた、そういうことらしい。

とりあえず、それはともかく

「監視ってなんだ？飯島警部の事か？」

「あ、そうか・・・私が教会の事件の犯人だと思ってたから知ら
ないんですね・・・」

今思い出した、という風な顔をして沈黙幽霊が続けた言葉は絶望的なものだった。

「犯人は・・・そして監視者は・・・」

大野という人です

夜遅く、私 エマは上田 一臣とか言うやつ探偵事務所に向かっていた。

どこで落としたのか知らないが携帯電話がなくなっていたのだ、まだ大野が見付かっていないというのにやつらとの縁を切るのは早すぎる。

たどり着き、事務所のドアを開ける。

「・・・大野・・・!」

そこにいたのは大野だった、さらに周りには誰もいなかった。これは都合が良い

「久しぶり・・・エマ・・・」

どうしてここに大野が居るのか知らないがそんな事はい、確認するために近づく。

「ねえ、大野・・・」

ほとんど抱きつくようにして体を寄せる、そして誰にも聞こえぬように耳に口を寄せる。

「私たちは・・・仲間よね・・・?」

そんなの当たり前じゃない

こうゆう返事が返ってくることを信じていた、いやこれ以外が返ってくることなど疑ってもいなかった。だが

「ごめんね、エマ……」

痛覚に刺激、いつの間にか私の腹部に１メートル弱の剣、いつの間にか大野の背には白い翼

「う、あ、きやあああああ！！！」

私が倒れ、苦しむ様を大野は冷淡に見つめている。

「あなたみたいな屑を、神様は許さないのよ……」

その呟きは誰にも聞かれず、エマの悲鳴と共に夜空に吸い込まれていった。

沈黙幽霊は事務所に大野が居る事は知らなかったらしい、俺と沈黙幽霊は事務所に向かって駆けていた。

道中、大野について、あの教会の惨劇について訊ねると簡単に答えてくれた。

あの教会は麻薬などを売りさばく組織の隠れ蓑にして上客だった、沈黙幽霊はそういった。

「警察では表立って中まで探る事はできません。なので協力者を教会に侵入させ、空き巣の振りをさせる事で警察は「捜査」の大義明文を得ようとした。そして私に依頼が来たのです。」

そうする事で麻薬事件は解決でめでたし、めでたしとなるはずだった、予定が狂わなければ。

「しかしその日に大野がああ惨劇を起こしたのです。動機は分かっていますか……」

そしてその場に居合わせた沈黙幽霊が大野を止めたらしい

「確かに手首を切り落とし致死量だったはずですよ。それでも生きているという事は相当手ごわいです、今は人間の範疇を超えた生物になっっているはずですよ」

それは三次汚染者という事だ、また厄介な事になるようだ。

話しているうちに部屋の前に着いた、速まる動悸を抑えながらドアに手をかけ一気に引く。

「ああ・・・探偵さん、お帰りなさい」

自然な声で、自然なしぐさで、「それ」は迎えてくれた。大野だ、背中に白い翼がある以外は。

見れば部屋の中に他の者の姿はなかった。

「亜理紗を・・・どうした!」

瞬間、怒りがこみ上げ眼が青から赤に変わる。

「心配しないで、屋上に寝かせてあるだけよ。どういう風にかは教えないけど」

怒りが深くなり眼が憤怒の炎に染まる、もう止まらない。

「てめえええええ!!」

叫びながら「それ」に向かって俺は走り出した。

第10話：化物の天使

人間なんて簡単に壊れる、私はそれを知っている。
だって時速60kmの鉄の塊に轢かれて亡くなった人間はまおやを私は知っている。

私の9年間げんじつは簡単に壊れた、父も壊れてしまった。

酒を飲み、賭けに熱中し、金を借りて最後には首を吊った。

残してくれたのは借金だけ、わざわざこんな厄介者を引き取ってくれるお人好しは残念ながら私の親戚にはいなかった。

だから本当に運がよかったのだろっ、孤児院を兼ねた教会の主に見つけてもらったのは。

「今日からここがあなたの家、この子達はあなたの家族です。」

はじめてみた時は驚いた、自分と同じ現実を壊された人間がこんなに明るく過ごせるなんて。

「はじめまして」

一番初めに金髪の女の子が声をかけてきた、この娘は確かこの孤児院の院長の娘だ。

その子が手を差し出してくれた、こちらも手を出して握手をする。

そして気付いた、ここに居るみんなはこんな家族がいるから明るく過ごせるのだと。

これが大野とエマの出会いだった。

「ねえ、神様って居るとおもっ？」

孤児院に来て2年、二人で庭を歩いている時、エマが話しかけてきた。

「……いても良い人じゃないと思う」

正直な感想を口にする、良心だけの存在なら自分のように不幸な人間を創らないだろう。

その言葉に頷いてからエマは自分の考えを口にする

「私はね、神様はみんなが思ってるほど偉くないと思うの」

いささか教会でするには不謹慎すぎる話題だった、それでも二人は話し続ける。

「神様はみんなを助けたいけど無理なの、だから不幸な人もいると思うの」

「何でそう思うの？出来るけどやらないだけかも知れないじゃない」

「だからね、神様は不幸な人も救ってくれるんだよ、一度不幸になっても諦めちゃダメなの。」

だってあなたもここに来て、救われたじゃない」

慎重しくにこりと笑い、エマが口にする。大野はまったく反論できなかった。

「信じていれば、絶対に神様は見捨てたりしないよ」

そう言つてエマはもう一度、にこりと笑う。

これが一番印象に残っている言葉、この頃は毎日が楽しかった。

孤児院に来てから10年、私たちは立派に神に仕えていた。

しかしその日、私の日常は再び壊された。

その日はセールスマン風の男が来ていた、いくら山奥といえどこの程度は珍しくない。

「だか 栄養剤 一度 」

言葉が断片的に聞こえる、この時対応していたのはお人好しのエマだった。

だから簡単に買ってしまった、栄養剤を売りつけるなど怪しいと主張しているような者だ。

現にそれは麻薬だったらしい。

もう一度言うが人間なんて簡単に壊れる、そこからはとても速かった。

エマが人に勧めたり、脅したりして薬を広めていったのだ。大野も使った、そうしないと教会では生きていけなかった。

その日から神様の言葉が聞こえるようになった。

麻薬のせいだろうが幻聴が聞こえるようになった、それも神の言葉として。

たまに迷っている時に聞こえてくるのだ、そして大野はいつも声の言う通りにしていた。

それが麻薬による物だと判断できる知能は残っていなかった。だから彼女にとってそれは神であり、麻薬とは無関係だと信じ込んでいた。

「ねえ、エマ・・・もうこんな事はやめましょう」

だからこんな事をよく言っていた、エマにはいつも軽くあしらわれていたが。

「もうここまできたら無駄よ・・・全員共犯で刑務所行きよ？」
脅すようにエマが言う。

「・・・小さい頃・・・神様の話したよね・・・？」

この話題が出たのは偶然の様なものだった、これが無ければ大野は今でも共犯者だ。

「そんなの覚えてないわ」

どうでも良いという顔でエマが返す。そして大野が言葉を続ける。

「神様を信じてればいつか絶対助けてくれるって・・・」

「そんな事言ってたんだ、私・・・」

大野の目に希望が映る、でもそれは一瞬だけ

「でも、今はどうでも良いわ。無いものなんかより有るもの信じたほうが良いじゃない」

薬の袋をことさら見せつけながらエマが言う、その時

コロセ

頭の中で声が聞こえた、幻聴だったのか大野の心の叫びだったのか知る術は無いが

彼女にとってはそれは神様の託宣だった。

そして次の日、彼女は惨劇を起こした。

「てめええええええ！」

上田さんが絶叫しながら敵 大野に向かっていく。

肩口からぶつかり3メートルほど吹っ飛んだ、普通の人間ならこれで死んでもおかしくない

そして吹っ飛んだ大野はそのまま窓ガラスを突き破り向こうの建物に飛んでいった。

「うおおおお！」

見ると上田さんは自前の跳躍力だけで隣のビルへと飛び移った、ちなみに距離は走り幅跳び世界記録の1.5倍ほどある、化物だ。

自分も向こうに乗り移ろうと自らの能力を使う

私のパラレルは骨の操作だ。骨の密度を一点に集めたり、普通は骨の無いところに骨を付け足したり出来る。

今使うのは後者の方で私は手の平から骨を突き出させた、結構痛いのだが文句を言っていられる状況ではない。

その骨を伸ばして隣のビルの壁に突き刺して、それを縮めて自分をビルの方へ寄せる。

分かりやすく言うと映画によく出るスパイの秘密道具みたいな感じ

だ。

ちなみにこっちの方がよっぽど化物って言うのは禁句、結構傷つく。ビルは都合よく無人だったようで周りに他の人の姿は無い。

そして大野は上田さんの丸めた背中に倒れこむような姿勢でその場にいた。

つまり、上田さんが止めを刺したのだ、見ればカッターナイフが心臓部に刺さっている。

普通に考えればこれで終わりだ、だが

「あぶないっ！」

これは私の声、かろうじて回避が間に合ったようだ。

大野はそのまま、上田さんに剣を突き立てようとし、上田さんが後ろに飛んでかわした。

そのまま上田さんは私の隣まで飛び退く、フードをかぶってなかったらまた恥ずかしくて戦闘ができなくなるところだった。

「あいつ何？もしかして右心臓とかいうオチ？」

時間が経って冗談を言う余裕が出てきたみたいだ、私はそれに真面目に答える。

「三次汚染まで進むと体の一部を増やしたり出来るから……たぶん心臓の場所を変えたか心臓を増やしたんだと思う……」

「……どうやって死ぬんだ、それ？」

「私、一回しか戦った事ないけどその時は誘き寄せて警察の人が一斉に銃とか撃ってた」

つまり増やす前に殺せば良いのだが二人では無理だろう。

「とりあえず飯島警部に連絡してみる！その間に亜里沙が安全か見てくる！」

亜里紗というのはあの少女だろう、私は承諾した。

「じゃあ、とりあえずこの建物の屋上まで上るぞ！」

私と上田さんは屋上に向かい、全力で走り出した。

第11話：自壊の自覚（前書き）

今回はいつもより長めでグロめです

第11話：自壊の自覚

ここは一条探偵事務所があるビルの屋上、そこにはハラワタを引き摺りだされ絶命した二つの死体が在った。

そしてそこには死体で無いものも一名、首からホワイトボードを吊り下げている。

その顔は死体の内の一つと同じ顔であった。

隣のビルが騒がしい、おそらく一臣が大野と戦っているであろう。片方は虚ろな瞳で、もう片方は真剣な顔つきで彼女たち 三崎 亜理紗はビルを見ている。

やがて生きている方の亜里沙は歩き出した、自分をその場に置いて・
・

とりあえず大野は置いて亜里沙を助ける事にしたのだが現実はその簡単に行く筈もなく

「うおお！危ねっ！」

階段を上ろうとした時、大野の右腕に持った剣が一臣の鼻先をかすめる。

「どいてください！」

後ろから沈黙幽霊の声が聞こえる、それに従い一臣は横に数歩退く。数瞬前に一臣がいた位置に研ぎ澄まされた白い刃の様な骨が振り下ろされる。

その骨は大野の腕を肩関節から叩き落とし、血飛沫とともに右腕が舞った。

「あらまあ・・・痛いわね・・・」

腕を切り落とされたというのに大野は涼しい顔をしている。

そして次の瞬間、大野から新しい腕が生えてきた。

「うわ・・・勝てる気がしねえ・・・」

「泣き言を言わないでください」

そついう沈黙幽霊もうんざりといった顔をしている。

「余裕ね、お二人さん」

そう言いながら大野が腕を伸ばしてくる、「伸ばす」という言葉そのまの意味で。

一臣はしゃがんでかわし、沈黙幽霊は横に縦にと壁を蹴り走っている、足の裏から骨を出しそれを突き刺す事で壁を走っているようだ。本体まで十数cmという所で沈黙幽霊は手の平の骨で大野の右肩を貫き、大野を壁に縫い付ける。

「左腕は任せました！」

沈黙幽霊の声に頷きを返し、一臣は両手の力で立ち上がる。

大野の左腕が関節を無視して 否、関節を増設^ふやして襲い掛かつてくる。

一臣はそれをリミッターを超えて引き出した動体視力と脚力で避ける。

腕が真下から来た時、手に持ったカッターナイフでその手の甲を突き刺す。

その上、落ちていたドライバーで関節であつたろう場所を刺し、二つの間を片足で押さえる。

「とりあえずこれで動きは・・・」

「全然ダメ」

沈黙幽霊の声を大野が遮る、そして肩のでたらめな所から腕が何本も生える。

「復元だけじゃないのか!？」

一臣が気付く頃にはもう遅い、大野はその腕で沈黙幽霊を抱く様にして締め付けた。

「とりあえず神様に・・・」

「っ！っうるさい」

喋りかけた大野のあごを骨の密度を上げた沈黙幽霊の手の甲が捉える、あごが割れ言葉は中断された。だが

「可愛げが無いわよ？」

大野の首の中ほどに切れ込みが入り、それは新しい口となった。

何本も腕を生やし、首で喋るその姿は醜悪で、神々しい背中が羽がむしろ不気味だった。

「とりあえず、この子は貰っていくわよ」

大野は 私はそう言うのと窓を割り、外へと飛び立った。
てんくちかいと

屋上で殺してあげなくちゃ地獄に落ちてしまつかもしれない、大野の麻薬とパラレルで歪んだ思考回路の考えた末、それが最善だという答えが出た。

既に二人、屋上で殺してある。

（同じ場所にしよう。）

特に意味はなかった、ただなんとなく。そんな事さえ考えなければ彼女は生き残っていただろう。

エマと亜理紗の死体が在る屋上へと舞い降りる、そこで大野は信じられないものを見た。

「・・・え？」

殺した筈の少女が生き返って、いや死体はちゃんと二つある、これはどうということだ？

大野がパニックに駆られているうちに少女はホワイトボードに字を書く。

『残念賞』

足音がする、誰かが階段を上っている音だ。その音が近づくと少女は、貯水タンクの裏に姿を隠した。

「・・・てめえ！」

足音の正体は一臣、こんな短時間で階段を上ってきたというのか。その眼の色は先ほどの赤とは違い、青い眼でこちらを見つめている。

「あらあら、探偵さんは手遅れだったようね」

こちらも動揺しているのだが落ち着いた態度を装い、手の中の少女を落とす、十分絞めたからたいした事はできないと判断してのことだ。

「ねえ、神様って信じてる？私はね、その神様に選ばれて天使になったの」

自分は動揺しているから饒舌になっている、それに気付かず話し続ける。

「私は天使だから悪い人は天国に運ばないといけないの、エマは神様を否定したしこの女の子はエマを匿ってたからこうならないといけなかったの」

理屈も何も無い、独り善がりの行動だった。それでも彼女は正しいと信じて実行した。

「馬鹿だな」

今まで口を開かなかった一臣が一言、大野を否定した。

「馬鹿、ですって？」

「ああ、馬鹿だ。信仰心は自由だし天使の話もどうでもいい、ただな・・・」

そこで一臣は一度、言葉を切った。

「他人を巻き込むな！」

その言葉が合図だった様に沈黙幽霊が後ろから右の胸を貫く。そして先程よりだいぶん遅い速度で一臣が走る。

「馬鹿はそつちよ。この距離なら十分復元できる」

大野は新しい心臓を造ろうとし、しかしそれは叶わなかった。
「・・・え？なに？う・・・そ・・・」

戸惑っている内に一臣のナイフが心臓を貫く。

「う、あ、・・・きゃああああ！！」

絶叫が街を包む、その叫びに掻き消されそんな声が大野の耳に届いた。

「あんたがなつたのは天使なんかじゃない。・・・ただの醜い化物だよ・・・」

その言葉に、大野はようやく自分^{げんじつ}が壊れている事に気付き、息を引き取るのだった。

第12話：「彼女」の存在

大野との戦闘から二日後、筋肉痛で痛む体で一臣は登校した。

「おい、聞いたか！？隣の中学に可愛い女の子が転校してきたらしいぜ！」

「マジかよ！？帰りにちょっと見ていかな？」

昼休み、机で干物になってる俺の横で同級生二人が話している。

「お前ももちろん来るよな？」

同級生の内の一人が言い、もう片方も同意したようで頷いている。

「現在超筋肉痛、行けるかボケ共」

こいつ等は何考えてるんだろっ、こっちは半病人だ。

「はぁ？お前学校に来る元気はあって美少女見に行く元気は無いのかよ！？」

「お前は何のために高校に通ったんだ！制服の可愛い女の子を見ないでどうする！？」

こいつ等は友人のはずなのだが思考回路が俺とは全然違うようだ。

特に後に話したやつ、お前はそんな事で高校の競争率を上げるな、

お前のせいで一人落ちたと思うと心が痛むぞ。

今から学食に行こうと思ってる中、余計な事で時間を取られたくは・

・・・・取られたくは・・・・ちよつと待て、何か幻覚が見える、自分の記憶が正しいならあれは事務所の居候の亜理紗だ、うん間違いない、そしてあいつがここにいる筈は無い、よし幻覚。

「おい、あの子誰だ？制服着てねえぞ」

さようなら、希望的観測、このまま関係を聞かれたりベタな展開になるんだろっなあ

結局、亜理紗は貯水タンクの後ろで寝ているのが見付かった、その時はもう死体が無くなっており、俺の見間違いということで話は終

わった（俺は納得いかなかったが）

『弁当作った。何もしないのも暇』

そうかそうか、でも学校来る前に渡そうな？お前は社会的にも道德的にも俺の立場を左右するんだぞ、下手したら俺は知的障害者の誘拐監禁事件の犯人だぞ。

一応弁当はありがたく受け取る、亜理紗の料理はうまいし。

その後質問攻めにあつたのは言うまでも無い。

最終的に亜里沙は「一臣のバイト先の新人（そして仲が良い）」で落ち着いた。

そしてその後、隣の一条中学校の校門前で待機中の俺、ちなみにこの近くには他に一条小学校も一条大学まである、すげえな一条グループ。

とまあ、現実逃避な無駄知識はどうでもいいとして、なぜ俺がここにいるのかというと・・・クラスの男子に引っ張られて来ました、結局こうなるのか。

「お！おい、あれじゃねえか？」

男子の一人が声を上げる、それにつられて全員そつちを向く。

「顔がよく見えないな・・・何で帽子なんかかぶってるんだ？」

「でも体つきは良いな、肌も白いし」

「へえ、なかなかですねえ」

上から友人A、友人B、一条だ。一条は人前では口調が変わる、本人の話では「こういうイメージを作っておいたほうが色々と便利」だそうだ。

「あ！今チラッと見えたぞ」

「見えた見えた！確かに可愛いじゃん！」

「すげー俺好みだ！」

こいつらは暇人A、B、Cだ。総勢7人とは嘆きたくなるほど暇な奴が多いな。

とりあえずそんなクラスメイトの驚きとはまったく別方面に、俺は驚いた。

だってそれは……沈黙幽霊だったのだから。

戦闘経験者の俺が惚れ惚れするほどの手際で色欲旺盛な5人が沈黙幽霊を囲んだ。

「名前は？」

「オシヤマ
郡山」

幽・・・

「どこから来たの？」

「広島・」

・

「何年生？」

「三年・」

・

「可愛いね」

「ありが

とうございます……」

「こんな所で大丈夫？喫茶店でも入る？」

「大丈夫

です……」

全員が一様に歯を輝かせてナンパモードに入っている、こいつら馬鹿だ……。

それに対して沈黙幽霊は居心地悪そうに答えている。

「一条……お前が何か細工しただろ？」

「ククク……ちよつと戸籍をいじっただけだ」

悪役の笑い方をして一条が答える、やっぱりすげえよ一条グループ。

『5時だよ、全員集合！』

「そんな古いのどこで覚えてきた？」

一応突っ込みはしておく。

放課後、いつものメンバーと沈黙幽霊は事務所に集まっていた。

「さあ、会議でも始めようか」

一番大きな椅子に座った一条が偉そうに言う。でもその通り、そのためにここに集まったのだ。

「とりあえず、沈黙幽霊の話だ」

俺が切り出す、そうするとつば付きの帽子を目深にかぶった沈黙幽霊が不思議そうな顔をする。

「あの・・・私についてってなんですか？」

「いやだから・・・協力するにしても住む所とか・・・」

「ああ・・・住む所なら大丈夫です、ここに住むことにしましたから」

口元しか分からないが確かににつこりと笑っていた、また増えるのか・・・こっちの都合も知らずに一条は勝手に決めやがる。まあ、都合なんて無いのだけれど。

『会議終了』

「いや、もつかよ！早すぎるだろ！？」

「まあ、気にするな。今回の本命は沈黙幽霊の歓迎パーティーだ」

真面目にやろうとしたのは俺一人か・・・

『料理はもう作ってある、適当にレンジで温めて食べて』

「はあ・・・まあいいか・・・沈黙幽霊、ようこそ一条探偵事務所へ」

その言葉を合図に、4人だけの宴会が始まった。

5時から始めた宴会は8時に終わった、沈黙幽霊と一臣是一条にジューズと騙されて飲んだカクテルで酔い潰れている。そんな中、亜理紗と一条は向かい合う。

「・・・おい、三崎」

「・・・」

彼女は喋れないが、喋れたとしても無言だっただろう。

「お前の死体があつたっていうのは・・・お前のパラレルだろう」

亜理紗は気まずそうに顔を下に向ける。

「俺の予想が正しければ、お前はこれからも組織に狙われるだろう」
亜理紗はまだ顔を下に向けている。

「お前も俺達を仲間と思っているなら力を・・・」

そこまで言つと亜理紗は外に向かい走つていつてしまった。

一条は一人、残される

（幼児退行した性格・・・さすがにあれには重すぎるか・・・）

亜理紗を思わずに言葉を発した事を悔いた、まだ早すぎた、と。

（それでもあいつには、戦つて・・・もらわなければ・・・）

一条は亜理紗のパラレルを知っていた、そしてそれはとてつもない力だという事も。

（また、今度・・・説得、して・・・みよう・・・）

一番大きな椅子で、見た目は一番小さな少年が眠りに付いた

第12話：「彼女」の存在（後書き）

これで第二編終了です。

この後、また番外編を入れたりパラレル／B（もう一つの小説）を進めたりするのでしばらく更新が遅れるかもです。

読者数を確認してみたら200人を超えていました、これがすごい事なのか、どうでもいい事なのかは分かりませんがとにかくこんな文章を暇潰しにしてくれている方々に感謝の意を表したいです、みなさん、ありがとうございます。

番外話 2：沈黙幽霊の事情

全ての人間が寝静まり、静かになった一条探偵事務所。
これはその中で眠るうちの一人、沈黙幽霊の追憶の夢。

（私は平凡だった、まだあの頃は12年しか人生を歩んでいないがそれは断言できる。

そう、あの頃の私は普通だったんだ。）

「でね、その時あいつがね」

友人の声で我に帰る、危ない危ない寝てしまう所だった。

ここは極めて普通の小学校の極めて普通の6 - 1。そこでの極めて普通の給食時間が今だ。

友人の話題は彼氏の話のようだ、そんなことに興味の無い私は「ませてるなあ」と思っただけでその会話に口を挟まなかった。

まあ、友人たちがそれを許すはずが無いんだけど。

「も顔は悪くないんだからもうちょっと真剣に考えなよあ」

「そうそう！　ならちよつと声かけたらいくらでもついてくるって！」

話題の矛先が私に向くと雨のように質問がぶつけられる。

「う、うゝん。でも私はそうゆうのまだ早いかなって・・・」

「早くない早くない！そんなこと言ったらおばさんになっちゃうよ！」

嵐のような批評に向かい、微笑んでその場を誤魔化そうとする。

でもそれは結局無駄で休憩時間の終わりまで私が解放されることは無かった。

（ホラね？平凡でしょ？このままだったら平凡な人生のままで終われてたのかもしれないなあ・・・）

その後も友人はよくその話題を出した。

でも自分は今のところ恋愛に興味は無かったし適当に聞くだけで流していた。

そんな私なのに、ある日一人の男の子に告白された。

とても驚いた、だってその人は私の友達の告白を断った人だったから。

私はその人の誘いを断った、ただ今は恋愛なんてしたくないだけ、

その人が嫌とかそんな事じゃなかった。

その人はとても怒った顔をしてこっちを睨んだ、だから怖くなってその場から逃げた。

その日の夜は友人への罪悪感とその人への恐怖でなかなか寝付けなかった。

（そうだ、この日だ。おかしくなったのはこの日から。世界をみたら些細な事、でも学校では大きな事件。まあ、被害を受けるのは私だけなんだけど）

次の日からそれは始まった。

話しかけても無視、仕事を押し付けられる、机に落書き、上履きが無くなる。

テレビで見るような、実に典型的ないじめだった。

一回だけではそれほどでもない、でも繰り返される事で私は少しずつ壊れていった。

不登校という選択肢は私には無かった、毎日笑顔で送り出してくれる母を拒む勇気なんて無い。

学校に行くフリをして別の場所に行く事も一度試したが学校側から家に連絡がありすぐにばれた、そして次の日からいじめは2倍ひどくなった。

（この頃はつらかったなあ・・・私、自己主張弱いし・・・初めてのころにきちんと説明とか反論とか出来てればよかったのになあ・・・）

日を重ねることにひどくなっていく、あのあとでは殴られる事なんかもある。

主犯は分かっている、私が断ったあの人と私の友達だった人たち。あの人にいじめられる原因はもちろん逆恨みだ、私に非は無かったはずだ。

元・友達にいじめられるのは告白される事が「裏切り」と思われたからだろう。

始めはあの人からのいじめだけでまだ我慢できた、しかししばらくするとあの告白の話が教室中で話題になり友人たちの耳に届いた、そして次の日からみんなの態度が急に変わった、という訳だ。

なぜ今更こんな話をするのかというたつた今その主犯全員に殴られているところだからだ。

中学生になってもいじめは続いていた いや、むしろひどくなっていた。

ここは人気のない港の特に人が通らない場所、倉庫のおかげで死角になりやすいし人を一方的に殴るのには絶好の場所だった。

もう殴られるのには慣れていいる、だから今絶望しているのはほかの事。

（どうして・・・そんな・・・）

私が断った人の腕にその人が断ったはずの元・友人が抱きついていいる。

理解できなかった、じゃあ私はなんだったのだ。

それならば始めからそうすればよかったじゃないか、私を巻き込む事なんて無かったじゃないか。

（わざわざ・・・私を・・・壊して・・・）

もう嫌だ、なんでこんな馬鹿らしいことで私は苦しまなくちゃいけないんだ。

（イタイイタイイタイイタイイタイ・・・）

口に出そうと思っても唇が腫れてうまく喋れない、言葉が出たと思っても鳩尾を蹴られて発声できない、やっと出た非難の声も嘲笑に

掻き消される。

その時、私の体は波打ち際の近くにあった、海岸線からの高さは目測で3メートル強、ここから落ちたら途中で頭を打って海に落ちることになる、おそらく死ぬだろう。

そんな事もわからない馬鹿がたくさんいた、むしろ波打ち際だということにすら気付いてなかったんじゃないかと思う。

止めは一番仲の良かった子、うるさいけれど暗くなりがちな私をいつも励ましてくれた子。

最後に1年前の普通だったころのことを思い出した。

体に落下感がある、女性の悲鳴と男性のあわてた声が聞こえる。どうやら私は落ちたようだ。

ガンッ！

コンクリートに頭を打った音を最後に私の意識は途切れた。

頭が痛い、言ってしまえば体中痛いんだけど頭が特に痛い。

「や、気が付いた？」

声がかけられた、大人の女性のものである。

「じっ・じっ、は・・・？」

「倉庫、どうせ使っていないんだから勝手に使っても文句ないでしょ」

すごい横暴な事を言っているその人のほうを向く、セミロングの髪に良いとも悪いともいえない体つき、その上にきっちりとしたスーツを着込んでいる。

ここまでなら街にいる普通のOLで通るだろう、しかしその人は頭から鼻先まで覆う奇妙な狐の仮面を付けていた、常識人っぽかったのが台無しだ。

「とりあえず私に見とれてないで自分の心配してみたら？」

そう言われて体に手を当てて致命傷がないか確認する、殴られ続けてきたので触れば大体の事は分かる、全然嬉しくない特技だけど。大丈夫か、と思った矢先後頭部に違和感を感じた、何か硬い物を触っているような・・・

「え・・・こ、れ・・・？」

「ああ、うん。それ、骨」

簡単に断言する。

でも骨が出るってことは致命傷という訳でそうなると私は危ないってことでアブないってことは・・・

「大丈夫大丈夫、あなたも思ってるようなことじゃないわよ」

あわてる私の様子をみかねたように狐仮面さんは気楽な声でそう告げる。

「それはあなたのちょっとした特徴のせいよ、色々と便利よ、それ」

片目をつぶる仕草をして私のほうへ近づいてくる。

「さて、あなたには二つ道がある。今のあなたは海に落ちて死んだ事になってるわ。

まああなたの能力と私の助けが無かったら実際死んでるから騙しきれるはずよ。

つまり一つ目は今までの生活を捨てて裏社会の住人になる事、二つ目は生きてる事を名乗り出て今までどおりの生活をする事。

どっちを選ぶ？」

私の中で答えは決まっていた、私は彼女の手を掴み微笑みながら立ち上がった。

「決まりね、しばらく色々と教えてあげるわ。私のことは姐さん^{あね}かおねえさんか狐さんって呼んで、みんな大体そんな呼び方するから」

そういつて彼女は太陽のように笑った、そのときの彼女は一人では抜け出せなかった私を助けに來た女神に見えた。

その後、必要な事を私に教え、3ヶ月ぐらいで私の前から姿を消したおねえさん。

旅の途中で一次汚染者になった時の症状「人に顔を見られると恥ずかしくなる」というのには相当悩んだがこれは過去の出来事からきているそうだ。

周り全てが敵だった経験から人に姿を見られたくない、という事にいつもいっしょにいるおねえさんの狐仮面の影響が加わりこんな症状になったそうだ。

私は一度死んだんだ、だからこれからは傍観者を演じてみよう。
私が必要以上に姿を見せず、敵に対しても同様である事からついた
「沈黙幽霊」という渾名には満足していた。

だから信じられそうな人が現れるまで、私はこのままдейよう、人
に関わらず関わられず。

そう決めていつも機械的に仕事をしていた、幸せ掴む前に餓死なん
てしたくないし。

そして今、私は信じられそうな人に巡り合えた。

目を開けるとそこには散らかった部屋が見える、これからは自分の
家になる部屋。

そこにいるのは一条 悟、三崎 亜理紗、そして上田一臣。

ようやく見つけた私の仲間だ。しんじられるひと

番外話2：沈黙幽霊の事情（後書き）

今回から行の間を空けるなど読みやすさを工夫してみる事にしました。今までのも近日修正予定です。

小説をまともに書くのはこれが初めてでこのような見苦しい事も多々ありますが今後ともよろしくお願いいたします。

最近あまり更新していませんが理由は夏休みが終わりに近づきあまり書く時間を取れない事とあまり進むともう一つの方のネタばれになるからです。

これからは書くペースが遅くなると思いますがご容赦ください。

第十三話：この子に優しさを

起きたら目の前に顔があつた、皆さんにこんな体験はありますか？
ちなみに俺は現在それを体験中です。

「・・・・・・・・あの〜」

沈黙幽霊改め郡山　幽は今、ソファで寝ている俺の真上で寝ている。

朝起きたらいきなりこんな状態だった、そういえば昨日の記憶が曖昧だ。

とりあえず早く起きて欲しい、体重が軽いのかあまり苦しくは無いのだがなんというか肉体的接触というか胸があたつてるといのか・・・

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・ふえ・・・」

郡山が寝起き全開な声を出している、どうやら起きたようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で見つめあう、そして郡山が視線を落とす、ごめんなさい俺に非はありません。

「え・・・・・・・・キャアアア！」

叫びながら全力で起き上がり部屋の隅まで逃げるように走る郡山。

「いやああ！なんでこんなことに！さっき起きた時そんなこと無かったのに！二度寝したらあんな状態って私寝像悪すぎ！」

とてつもない早口でぶつぶつ独り言のように言っている、弁解したいが俺も声が出ない。

「・・・ま、まあおれはもう少し寝るから」

逃げるようにそついうと再び眠りに着こうとソファーに寝転ぶ。

「ん？」

今気付いたが俺が寝ているソファーは向かい合わせに二つのソファーをくつつけた物だった、ちょうど人二人が並んで寝れるような・

ゴロン、という感じの音がして何かが寝返りを打つ。

案の定、それは亜理紗だ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

それはもういい、さっきやった。

亜理紗は至極落ち着いた様子でソファーから降りる、良かった誤解だと気付いているみたいだ。

見ると亜理紗はホワイトボードに何か書いている、書き上げたらしく一点の曇りも無い笑顔でそれを見せる。

『ド変態』

前言撤回、誰か助けて主に道徳的に。

「くつくつく・・・なかなか面白いことになってるじゃないか」

「一条・・・お前か・・・！」

非難をこめて睨むが「柳に風」といった風に軽く流す。

「いやあ、さすがに二人も運ぶのは面倒だったぞ、良いリアクシヨ
ンが見れたから文句は言わんがな」

そう言うといっちはいつもと同じ風に心底面白そうに笑うのだった。

腰まで伸ばしてある髪をゴムで後ろに束ねて私 三崎 亜理紗は買
い物に来ていた。

「あらあらまあ、三崎ちゃんこんにちはあ！」

私に挨拶してくるのは魚屋のおばちゃんだ。

私は世間的に「一条さんに雇われた住み込みのバイト」という事にな
っており、ここはいつも利用している表商店街の魚屋だ。

ちなみに表商店街とは通称で平和な方の通りは住人にそう呼ばれて
おり、こことちょうど隣り合わせにある危ないお店だらけの商店街
は裏商店街と呼ばれている。

「今日はね、秋刀魚さんまがオススメ！旬にはちょっと早いけど良いのが入ったのよ」

『それください』

三崎のここでの評判は「健気な女の子」だ、それゆえ商店街の人たちは喋れない自分に気を使ってくれたり今回のようにオススメを教えてくれたりと親切だ。

「はい！お釣りはこれね、じゃあ気をつけていきなさい！」

いつも元気なおばちゃんちゃんは店から離れる時も笑顔で手を振ってくれるのだ。

（秋刀魚なら大根を買わないと。ポン酢は・・・冷蔵庫にあったかな、幽ちゃん魚好きかな？）

考え事していると、ふと何かが視界を横切った。

振り向いてそちらを見ると急いでいる背中があつた、小さい背中だ、小学生ぐらいではなかるうか。

声を出そうとして・・・自分にはそれが出来ない事を思い出した。なので、追いつく。

「・・・っ！」

驚いた様にその子は立ち止まる、どうやらこっちに興味を持ってく

れたようなのでホワイトボードに字を書いて伝えてみる。

『どうしたの？』

その子は女の子だった、切り揃えたとは思えないぼさぼさの髪に、着ている物も頭からつま先までフリーマーケットに行けば1000円ぐらいで揃いそうだ。

いや 前言撤回、病院にも行かなくてはならない。その子は片目にガーゼの眼帯をつけていた。

「ふ・・・ふえ・・・」

その子が嗚咽を上げる、泣いているようだ。

そしてこつちに近づいてきてズボンを掴み本格的に泣き出した。

「うあああ！お兄ちゃんが！お兄ちゃんがあああ！」

その子が泣き止むまで私はずっとおろおろしていた。

とりあえず泣き止んだその子を連れて事務所まで戻ってきた、お魚を冷蔵庫に入れないといけないし。

眼帯の女の子は泣き止むと一言も喋らなくなったが、それでも自分について来てくれたのでみんなに相談しようと思つた。事務所に来ただけど・・・

（居ない・・・）

よく考えれば当たり前だ。

今日は平日、幽ちゃんと一臣くんは学校のはずだし不登校の一条さんも普段は自分の家にこもっている。
どうしよう・・・

「う、あう・・・」

声は小さいがこの子はまた泣きそうになってるみたいだ、こんな時に自分が戸惑って入られない。

亜理紗は決断した。

（一条さんの家に行ってみよう・・・！）

第十四話：彼に助けを（前書き）

今回は事情があり短めです・・・

第十四話：彼に助けを

一条さんの家に着き、大きい家だなあと感激し、正にメイドという感じのお手伝いさんに案内されて部屋にたどり着いたら・・・

ウェディングケーキになった一条さんがいた。

もちろん比喻だがそう形容するにふさわしい、少女なら大半は憧れるような純白の美しいドレスだ。

そして念のために言っておくと　一条さんは男だ。（まあ見た目少女だが）

『女装癖に目覚めた？』

顔を背けて聞く、きつと気まずそうな顔になっていただろう。

「違いますよ、これは無理矢理やらされただけです」

あ、口調が余所行きモードだ、よく見ると周りにお手伝いさんたちが群がっていた。

「すみません、友達が来たので皆さん仕事に戻ってください」

一条さんニコニコスマイルで言うと、不満気ながらお手伝いさんたちは部屋から出て行った。

「さて亜理紗、その子供は誰だ」

一条さんはいつもの口調に戻り、「ニコニコ」からいつもの「ニヤ

ニヤ」に戻った。
さっきの方が良かったな、とか思いながらこの子の事を話し（書き）始めた。

話が終わっても少女は口を閉ざしていた。

「なるほど、それで俺の家に、か。だが人探しをしたいなら別のやつを当たってみろ」

『どうして？』

「・・・結構普通に外に出たりもするが俺は基本的にヒキコモリだ、社交性は期待しないほうが良いぞ」

忘れてた、だって普通に事務所にいたりするんだもん。

『前に学校行ってた』

「それは幽の転入を確認するためだ、俺は他人と話すのが大嫌いだ」
珍しく気分の悪そうな顔をして一条さんが答える、これは本当に無理なようだ。

「そろそろ中学は終わる時間だ、幽に頼めばどうだ？」

『そうする』

私は学校の方面に向かうことにした。

ここは裏商店街。

（さて、どうするかな）

ここにいるのは一臣だ。今日は学校中、野良犬の死体だらけという事件がおき休校となった。

危ないような気もするが依頼でもないので放っておいて、しかしこんな時間に家に帰るのもなんとなく嫌で、一臣はもしも請ける事になった時のため情報収集でもしようとしてここに来ていた。

表では知らない者の多いパラレルだが裏の人には周知の事実だ。

（とりあえず・・・喫茶店でも行ってみるか）

裏商店街の喫茶には情報屋が集まる、誰が決めたのか知らないが便利なので一条の元で働くようになってから、一臣はよく利用している。

まず、一番大きい喫茶店に向かおうとした時・・・

「おい、そこのお前。待て」

男に呼び止められた。

一臣と同じ年ぐらいの青年だ、穿き古した感じのジーンズに上はまだ残暑が厳しいと言うのに薄手のコートを着ている。目つきは鋭くそれでその人間がどういう人種なのかを想像できた。

「・・・何の用だ？」

「この情報屋から聞いたんだが、どんな仕事でもやる探偵というのはお前か？」

青年は淀みなく続ける。

（うつわ、とうとう一条以外からも俺の事が洩れるようになったのか……どうにかしてくれ……）

一臣はと言うと鬱陶しそうに顔を背けた。

「妹を探してくれ」

それを肯定ととったのか青年はさらに続ける。

「人探しなら警察に頼めよ」

「警察はまずい、分かるだろ？」

法に頼れる者などここでは稀だ、そういう人間のための「裏」商店街なのだから。

「……はあ。とりあえず事務所に来い、話はそれからだ」

やはり面倒くさそうに、一臣は言った。

第十五話：彼女に答えを（前書き）

少しずつ書いていたので文法が安定していません・・・
更新を3週間もサボり申し訳ありませんでした。

第十五話：彼女に答えを

ここはビルとビルの隙間、つまり路地裏。

風紀的にも物理的にも汚れたこの場所に、佇む影が二つ。

「あゝ、さいっあく！」

悪態をついたのは派手な衣装に身を包んだ女だ。

「最悪などと簡単に使っな、『最も悪い』状況などそうあるものではない」

答えたのは作業着のズボンに上はタンクトップという、建築現場に居れば似合いそうな筋肉男だ。
年齢は20頃だろうか。

「あー、あー、あー、嫌だねー。生意気にも私より若い癖にタメ口きいて説教ですか」

「すまないな、敬語など一度も使ったことが無い」

「はい、はい、はい。そうですかそうですか私が悪かったですよっ
と」

喫茶店でも違和感が無いような緊張感の無い会話を続ける二人、
しかししばらくすると女のほうは顔を引き締める。

「で、本当に居るみたい？」

「姿を見るまではなんとも言えん、だが可能性は高い」

どうやらこちらが本題のようだ、男も顔は元から引き締まっているが声が先ほどとは違う。

「逃げ出したのは二人なのよね？」

「そうだ、『忌崎』の次男と三女。早急に処置せねばな」

誰も居ない路地裏で、一般市民には理解できない会話を繰り広げていく二人。

「うふふ、すぐ捕まえてあげるわよ。ネズミちゃん……」

女が卑らしく笑いながら放ったその言葉を最後に、二人は会話をやめて歩き出した。

日の光が当たる所へ、二人の「目的」がある場所へ。

「一条、女装癖に……」

「それはもう良い」

ここは一条家の客間、少し前まで亜理紗がいた場所だ。そして今ここにいるのは一条と一臣、そして依頼人の青年だ。

「おい探偵、このガキはお前の仲間か？」

「話すと長くなるから要約するがこれは男で、俺と同一年で、俺の

雇い主だ」

依頼人は怪訝そうな顔をしていた、詳しく話すのも面倒なので無視する。

「そうだ一条、亜里沙を知らないか？」

一条は事務所に帰って亜理紗がいなかったので依頼人を連れて一条の家に来たのだ。

「・・・亜里沙ならさつきいたぞ、すれ違いになったな」

「あー・・・心配してここまで来た自分が馬鹿らしいな」

とりあえず話すことを話して一臣は安心したようだ、ソファに座り茶を飲む。

「・・・依頼はここで言っているのか」

「あ、そういえば忘れてたな。どうぞ」

依頼人も安心したようにソファに座り話し始める。

「妹を探してくれ、だったよな？」

一臣が切り出す、それに対し依頼人は頷き言葉を続ける。

「訳があつて妹と二人でこの街に来ていたんだ、でも・・・人が多いところに行くなんて初めてだったんだ・・・」

依頼人は悔しさをこめて拳を強く握る。

「情報屋に会うのはどうした？」

「金ならあったからな、見つけるまで3日はかかったが」

裏商店街は金を持っている人間には優しい、無くなるまでのしばらくの間だけだが。

「一臣、請けるかどうかはお前が決める。お前が持ってきた仕事だ」

一条の言葉から間をおかず、一臣は答える。

「困ってるみたいだから請ける、金はもらっけどな」

一臣は立ち上がり、それに釣られるように依頼人も立ち上がる。

「よし行くぞ、今更金が無いなんてのは無しにしてくれよ？」

「ああ、……ありがとう」

二人の受け答えの合間に一条も立ち上がり口を開く。

「決まりだな。おい一臣、依頼人の名前を聞いてくれ」

「はあ、分かったよ」

一条のヒキコモリを知っているので一臣は渋々了承する。

一条は「外に出ること」や「人と会うこと」は普通に出来るのだが「慣れていない他人と話すこと」が出来ないのだ。

「あんだ、名前は？」

「……どうして名前を聞く？」

「呼ぶときに不便だろうが。名前すら言えない奴を信用するのも嫌だしな」

「……イミサキ 忌崎 アツシ 敦だ」

その名前を聞いて、一条は少しいぶかしむ様なそぶりを見せたがやめた。

確かに妙な苗字だけれど世の中、そんなことはいくらでもある。
たかなし 小鳥遊という苗字を知ったときは驚いたものだ。

「えっと、じゃあ早速探るか、敦」

俺の言葉に敦は黙って頷き、俺たちは一条家から出て町へ向かった。

第十五話：彼女に答えを（後書き）

なんだかグダグダですね、すみません・・・
一度構想していたものから少し変えてしまつて、そこからつじつま
合わせや軌道修正なんか考えてるうちにむちゃくちゃに・・・
一度長期連載停止するかもしれません・・・

連載一時停止のお知らせとお詫び

2ヶ月もほったらかしにして、こんな内容ですみません。

この間にも一応色々と書いてみたのですが、やはり話が上手いきませんでした。

この話は元々友人達と冗談交じりで開催した小説大会で書いた初の小説でした。

それから文章を書く楽しさに気付き、所々に手を加えて投稿したのですが

大まかな話は考えているとはいえほとんどノリで書いている事、一度物語の構想を変えた事が響き、妙な感じになってしまいました。（後半が堂々巡りのようになっているのもそれが理由です）

それに私の文章力不足もあります。

大筋の話は出来ているとはいえ、一部分一部分が未熟であり、大した文章は書けませんでした。

高校受験さえ終われば暇が出来るので、その間に文章の勉強をしようと思います。

元々とても気に入っている作品なので、完結させられる自信がつけば再び連載を続けさせて頂こうと思っています。

一年後になるか半年後になるか、2ヶ月程度で再開するかは分かりませんが、

自分が納得できる程度の腕前になれば、一話から書き直そうと思っています。

実際に投稿するかどうかは未定ですが、筆力向上も兼ねてコメディ

を考えています。

コメディならば、物語はノリでも何とかなるので

（友人達の間での小説もどきでは大丈夫だったので）

文章を勉強するには丁度いいと思ひまして。

そのコメディを書く場合、「パラレル」のキャラを入れようと思っ
ています。

最後が非常に中途半端になってしまい、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4169c/>

人類異端 パラレル

2010年10月20日18時54分発行